

文脈原理・全体論・一般合成性

高谷 遼平(Ryohei TAKAYA)

慶應義塾大学/日本学術振興会

「ある単純表現の意味が、その他の表現の意味によって決定される」ことは可能だろうか。一見するとこのような主張は合成性と直接的に矛盾するようにみえるが、フレーゲの文脈原理やデイヴィッドソンの全体論など、ある表現や文の意味がそれを含むより複雑な表現や文（や言語全体）の影響を受けるという考えは言語哲学において珍しくない。しかしながら、このようなテーゼの内実を正確に把握すれば、多くの場合それらと合成性の衝突は回避されていることが見て取れる。例えば、よく知られているように、合成原理が個々の文の意味決定に関する合成性を求める一方、文脈原理は一般に文が持つ意味のタイプ（真理値）に応じて名前や述語の意味のタイプ——項述語ならば個体から真理値への関数——を規定することを求める原理であり、両者は衝突しないばかりでなく補完関係にあると言って良いだろう。意味に関する全体論や分子論もまた、ある一定の解釈（例えば解釈的全体論）のもとでは合成性と両立可能である。

では、上記の主張をまさに文字通りの形で、すなわち、ある文に出現する単純表現の意味がその文中に出現するその他の表現の意味によって決定されるという形で形式意味論に取り込むことは可能だろうか。本発表では、近年の合成性に関する研究において登場した一般合成性(General Compositionality, cf. Pagin&Westerståhl (2010) “Pure quotation and general compositionality”)という合成性概念を取り上げ、この概念を用いている意味論において「ある単純表現の意味が、その他の表現の意味によって決定される」という主張が成立していることを示したい。

一般合成性と従来の合成性の大きな違いは、表現の文中における構造的な位置を合成性の定義に組み込む点にあり、表現の意味（意味論的値）は文脈とその構造的な位置という二つの要素に影響されることになる。この概念を暗に用いている意味論としてフレーゲによる信念文の分析一文は間接的文脈において真理値ではなく意義(Sinn)を指示する一が挙げられるが、本発表では一般合成性をより明示的に組み込んだ意味論を取り上げ、表現の文における構造的な位置を意味論的値の決定過程で使用することは「ある単純表現の意味が、その他の表現の意味によって決定される」ことを含意していると主張する。もしもこの主張に妥当性があり、かつ一般合成性が自然言語意味論の合成性として十分なものであるならば、一般合成性に基づいた意味論はその他の意味論には無い非常に魅力的な特徴を持つことになるだろう。